

ジ

ヨージ・W・ブッシュ大統領は先の選挙で勝利するやいなや、二期目の國務長官に初の黒人女性の任命を決定した。コンドリーザ・ライス博士。国際政治学者で元スタンフォード大学副学長。

ライスは、黒人労働者が差別に抗しながら鉄鋼産業に生きたアラバマ州バーミングハム市に育った。町を見下ろす丘には、ローマ神話の火と鍛冶の神「ウルカヌス」の像が立っていた。ブッシュ政権の対外政策チームは、ライスはか、チェイニー副大統領、パウエル國務長官、ラムズフェルド国防長官、アーミテージ國務副長官等々。本書はその出世物語を通じてエリートに求められる資質を描き出す大作であり、ハルバースタムの『ベスト・アンド・ブライテスト』（ケネディ兄弟、マクナ马拉等）の趣の権力中枢のドキュメンタリーである。

本の題名はライスの育った町に由来するより、ブッシュの外交チームが、たくましさ、粘り強さ、耐久力を象徴するウルカヌスというニックネームで内部で呼び合っていたことによる。他方でその呼び名が、最年少のライスに関連しているのは偶然でもない。だれもが、彼女こそが大きく育つ幹であると直感してのことであった。彼女は毅然として独自の世界

を築き、自制心に富み、静かにかつ決定的な品格をもって物事を進めていく。ライスのブッシュ大統領への忠誠を特筆する論評が世には多いが、本書はむしろ大統領こそが彼女に忠実でありたいと思うにいたる彼女の政治的資質の深さを照射していく。

ライスの父親は牧師、母親は学校の教師。明白な人種差別のあった時代に、両親は一人娘にピアノ、ヴァイオリン、フランス語を習わせる。ライスは小学校のクラスメートが人種暴動に巻き込まれて死亡するという絶望を見て育つ。ついに一九六四年、公民権法が成立すると、両親は入店を拒否されていたレストランに、娘を堂々と連れて行った。困難のなかでも、あきらめず、準備を怠らず、品格をもって毅然として生きる姿勢を、今は亡き両親は娘に授けた。

高校の進路指導相談員は、黒人には大学進学は無理と示唆したが、ライスは差別の少ない音楽を専攻し、デンヴァー大学でピアノを専攻した。そのころ、クリントン政権下の國務長官であった旧チェコスロバキア出身のマドレーン・オルブライト女史の父親が亡命先の同大学にてソ連政治を教えており、ライスはがその講義を聴いたことから国際政治学に専攻替えしたことは有名な話である。博士

ブッシュ戦争政権 外交チームの実像。

猪口邦子・評

上智大学教授、国際政治学

号を取得すると、ライスはスタンフォード大学で教える傍ら、後にその統括者となり、国家安全保障会議の最下位のスタッフとしてホワイトハウス入りをしていく。三十代半ばのころである。

ブッシュの外交チームの特徴は、三十代半ばから四十代前半の若さで共和党権の中枢に抜擢され、育てられてきたところにある。現在では最年長閣僚であるラムズフェルド国防長官は、フォード大統領下で四十三歳の史上最年少の国防長官を務めたことがある。多くのプロが消

えていくなかで、政治的センスと自制に長けて政権中枢で成長し続けた群像の粹が、9・11同時多発テロの衝撃を被ったブッシュ政権の対外政策を支えている。その政策内容の好き嫌いを人は論じても、専門家チームの総合的な強さが米国の優越を生み出していることは否定しがたい。

彼らの軌跡をみると、ネオコン(新保守主義)のラベルや強硬派という先入観が無意味なことを知る。彼らは保守主義や軍事中心主義の教義に執着する政治家ではなく、米国の優越を追求する対外戦略のプロであり、その一点を巡っての頭のよさを大統領の下で競う俊才たちである。三十代のラムズフェルドはホワイトハウスのスタッフとしてベトナム戦争から撤退することをニクソン大統領に直言し、大統領はその反戦的立場を「ラムズフェルド問題」と呼んで、更迭案を作ったが、時間の経過と共に彼の正しさが明らかにになり、大統領府に残った。後にウオターゲート事件が発生すると、共和党は人材温存のために若きラムズフェルドをNATO(北大西洋条約機構)大使として欧州

に逃し、多くのスタッフが巻き添えで政権を去るなか、無傷でフォード政権下で大統領主席補佐官としての帰還を可能にした。

Cheney(現副大統領)は、そのとき彼が雇った副補佐官であった。俊才肌のラムズフェルドに仕える若き Cheney は、大小を問わずにボスの気になるすべての問題を必ず解決することを学び、その経験は今ではブッシュ大統領に対して生かされている。後に国防長官も務めた Cheney は三十代に残しているメモを見ると、ホワイトハウスのトイレの配管工事の心配、ベティ・フォード大統領夫人のヘリコプターの座席の改善等々から、沈没したソ連潜水艦の取り扱い問題等々に及び、だれよりも長時間働いたという。ウルカスたちの共通項は、だれも助けてくれない力量が問われる勝負の瞬間に、巧みに対処してきた点にある。一九八九年のある日、モスクワ市の前共産党第一書記であったエリツィンが、現大統領の父のブッシュ大統領との面会を求めた。正式の会談を予定するわけにはいかないが、むげに表敬を断るのも適切でない

という判断のもと、正式にはホワイトハウスにてスコウクロフト国家安全保障担当補佐官との面談をセツトし、ブッシュ大統領が偶然立ち寄るといふシナリオで対応することになった。エリツィンを玄関先で迎える難しい役は、当時スコウクロフトの下にいたライスが担当することになった。案の定、巨体のエリツィンは大声で大統領との会見の確約がないなら、これ以上一歩も進まないという。ホワイトハウスで若い黒人女性に出迎えられるとは思ってもいなかったという態度でもあった。

ライスは相手を知り尽くしているかのような落ち着きをもって、もし、米国の国家安全保障担当補佐官との面談の約束を反故にしたいのなら、ホテルに帰るよう、と最後に述べた。その態度、言葉、威厳、立論には、未来のロシア大統領をねじ伏せるパワーがあった。

エリツィンは階段を上って補佐官室に入った。予定どおり、ブッシュ大統領はそこにひよっこ立ち寄り、エリツィンはそれ以来、ライスに頭が上がらないことになる。●

ジエームズ・マン著 ウルカスらの群像

ブッシュ政権とイラク戦争

渡辺昭夫監訳／共同通信社／二九四〇円

